

蒼き風に抱かれて

— ニュージーランド一万キロ —



登場人物紹介。右、僕。井上勝夫。著者。撮影者。左、ふーすけ。カエルのふーすけ、おサルのふーすけなど、多数の異名を持つ。

バイクのない始まり

蒼き風に抱かれて

「ねえねえ、バイクがないよ」

ふーすけの、のんきな声で目が覚めた。

「ふーん。そう」

寝ぼけている僕は、ふーすけの言うことを無視して、まだこのまま寝ていようと思った。
「ねえねえ」

ふーすけがもう一度僕を起こそうとして、背中を押してくる。うるさい。仕方なく僕は、開けたままのテントの出入口から、外の様子を見てみることにした。

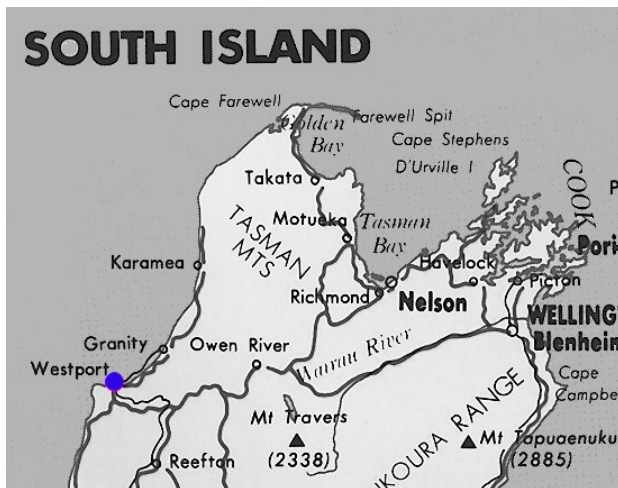
バイクがない。ふーすけの言う通り。

「なんでないの？」

僕は間抜けな質問をした。ふーすけは知らないと言うように、首を横にふるふると振った。

ここはキャンプ場の中。ウエストポート。ニュージーランドの南島。

外に出て、キャンプ場の中を一周してみる。TENERE600はどこにもない。とりあえず、キャンプ場のオフィスに行った。



『僕の青いモーターサイクルを知りませんか？ どこにもないんですが』

たどたどしい英語でも通じたらしい。オフィスのお婆さんは、急に笑顔を消して言った。

『警察を呼びますか？』

ここで初めて僕は確信した。：バイクは盗まれた！

「さて、これからどうしようか」

テントの中で、これからのことを考える。ポリスは『全力で捜し出すよ』と言ったけど、そんなのは当てにならない。オークランドのレンタルバイク屋には、キャンプ場のオフィスのお婆さんが連絡をつけてくれたが、それによると新しい別のバイクも貸さないし、前払いで全額払った金も返さないという返事だったらしい。今日は借りて十二日目。契約期間は、あと六十日近く残っている。

「金が本当に返ってこないとしたら、ヒッチハイクで旅するしかないぞ」

レンタルバイク屋に払った金、約四千ドル。残りの金、約四千ドル。別のレンタルバイクを借りることなどできない。

「やだよー。ヒッチハイクなんてやだ。バスで回ればいいじゃない。電車とかー」

ふーすけは駄々をこねながら、テントの中を転げ回った。そこら中にぶつかって、テントが揺れる。

僕たちの荷物とはとても多い。バイクから下ろして広げると、とても全てがバイクに乗るとは信じられないくらい多い。それらのものを持って移動するなど、僕だって考えただけでも嫌になる。でもすぐに名案が浮かんだ。

「自転車で旅しようか。二台の自転車に荷物を分ければ、これだけあったって大丈夫だからさ」

自転車はけっこう安く売っている。それに僕は以前はチャリダーだ。

「うん。それならいいかも」

ふーすけは案外簡単に賛成した。でもふーすけは家に自転車も持っていないようなやつである。本当に大丈夫なのか心配だ。少し脅かして確認してみることにした。

「でも登りはきついことを覚悟しなくちゃいけないぞ。すぐきついぞ。バイクで五分のところ、一時間掛かるんだぞ」

「うん。私、がんばるよう」

ふーすけはこくりとうなずいて、決意の表情をした。頭を撫でてやる。

「自転車、自転車♡」

ふーすけはなんだかうれしそうだ。手でペダルを漕ぐまねをしたりしている。そういえば、ふーすけは以前から自転車を欲しがっていた。疑惑が僕の心をよぎる。

「ふーすけ、ひょっとして自転車がほしかったから、こっそりバイクを捨ててきたんじゃないの？」

「はっ！」

浮かれていたふーすけは、いきなり僕から顔を背けた。

「やっぱりそうだったんだな」

僕の追及に、ふーすけはこくりとうなずいた。

「自転車、ほしかったから：」

ふーすけはさらに顔を背けながら、ぼつりとつぶやいた。

さて、そんなことをして遊んでいると、誰かがテントの外から声を掛けてきた。

『モーターサイクルを盗まれたんだって？』

テントを覗き込んできたのは、同じキャンプ場にテントを張っている、原爆頭のスイス人ライダーだ。

『そうなんだ。昨日の夜か、今朝まだ暗いうちに盗まれたらしい』

答えると、彼は意外なことを言った。

『昨日の夜、港で君たちのモーターサイクルを見たような気がする』

僕とふーすけは、港まで歩いて行ってみることにした。



原爆頭のスイス人ライダー。情報はガセネタだった？



いろいろと面倒を見てくれたキャンプ場のオフィサー。この赤いオヤジがくせもの。

不安な移動

人気の無い港で、僕たちはずいぶん目をギラつかせてみたが、結局見つかるはずはなかった。スーパーで夕食の買い出しをして、キャンプ場に戻る。警察から何か連絡がなかったか、オフィスで聞いてみた。

『モーターサイクルは見つかったよ』

オフィスのおやじは当たり前のように簡単に言った。

『本当の本当に!?』

僕たちは信じられない思いで、五、六回確認してみた。おやじはその度にうなづく。

『川で見つかったらしい。明日からまた君たちは旅ができるさ』

それを聞いてふーすけは大喜びだ。でも川というのが引かかる。

『川の中で?』

僕は独り言をつぶやいた。それを聞いたおやじがまたうなずいた。

『そうさ。どこかの野郎が、洗ってやがったのさ! ハーッハッハッハー!』

おやじは顔を真っ赤にして、自分の言ったことに大声で笑った。

バイクが見つかったと聞いて、ふーすけはすっかり安心してしまったけれど、僕は実際にバイクが自分たちのところに戻ってくるまでは安心できなかった。夕方になっても何の音沙汰おとさたもないから、僕は単身ウエストポートの警察署に乗り込んだ。

実はバイクはすぐに見つかったらしい。だがクランクケース（エンジン）にひびが入っていて、なんとそのままオークランドに送り返されてしまったということだ。明日からまたバイクで旅ができるなんて、とんでもない!

翌日、僕たちは移動することにした。行く先はクライストチャーチだ。南島で一番大きな街だし、なにより日本で知り合った友人のエナが住んでいる。ここからは約三百三十キロの距離。南島を横断することになる。この先どうなるか分からない今は、少しでも金を節約しなければならない。となれば当然ヒッチハイクである。

「ヘルメットを持つてるから、バイクにでもヒッチハイクできるね」

ふーすけが言う。なるほどそうだ。

「よし、ぜひそれに挑戦しよう!」

まるで映画『イーजीライダー』の世界ではないか。それにもし乗せてくれるライダーが、金髪のムチムチ美人だったりしたら…。

『しっかり私につかまっているのよ』

僕は彼女のキュートなお尻をしっかりとニーグリップして、細すぎるくらいのウエストに腕を巻きつけて答える。

『YES！ YES！』

彼女の野性的な美しさは、そのまま彼女のライディングスタイルにも現れる。彼女のアメリカンは左右に素早く倒し込みを繰り返し、その度に美しい長い髪が僕の鼻をくすぐる。バイクの振動にあわせて、彼女のはち切れそうな胸が、僕の腕に心地よいバイブレーションを与えてくれる…。

「ああ！ そんなことが本当にあつたらどうしよう！」

僕は自分の想像にすっかり興奮して、激しく身をよじらせた。ふーすけはそんな僕を全く無視して、せつせと荷作りをしていた。

出発前に、キャンプ場のオフィスのおばさんが、もう一度レンタルバイク屋に電話をしてくれた。返事は『修理してまたそれを貸すつもりだ。だが詳しい答えは五日後に出す』だった。

『全く、なんて融通がきかないのかしら！』

電話を切ったあと、おばさんは電話の向こうの见えない相手に対して、吐き捨てるように言った。大きな人なので怖い。まるで僕たちが叱られてるようだ。しかし段々と情が湧いてきたのか、おばさんはずいぶん親切にいろいろとアドバイスしてくれた。

『あなたたちはちゃんと保険に入っているんだから、少なくともこれから先のお金を返してもらう権利はあるんだからね』

『I WILL TRY IT.』

答えたふーすけに、おばさんは即言い返した。

『NO！ YOU DO！』

おばさんの迫力に、僕たちはたじろぎになってしまった。このおばさんをオークランドに派遣できたら、どれほどいいことだろう。

全荷物を持つと、さすがにすごい重量だった。だけど僕は、いったいどんなすごい美人が乗せてくれるのか、考えるという顔がほころんでしまう。そんな僕を見て、荷物の重さ

にしょぼくっていたふーすけは呆れた顔をした。

「本当にのんきねえ。こんなことになっているのに」
言ったあと、突然ふーすけは歌を歌い始めた。

「♪ハ、ハ、のんきだね♪」

自分のほうがのんきではないか。



回想

それにしても荷物は重い。三十キロくらいありそうなバイク用のテールザックを背負って（フレームがつけてある）、左右のサイドバッグの一つを肩に掛け、もう一つはヘルメットと一緒に右手に持つ。ふーすけは中型のザックを体の前にも後ろにもつけて、片手にヘルメット、片手に大きな三脚付きのカメラ。こんな日に限って空は青空、気温上昇、暑いのはなんの。五分歩いただけでくたばってしまった。木陰で休みながら、僕は今日の日までのことを思い出した。

格安の航空券を買った僕たちは、最初マレーシアに飛んだ。そこで四日間の滞在をしたのち、一月半ばの真夏のニュージールランドにやってきたのだ。クアラルンプール発オークランド着の飛行機は、なんとしたことかファーストクラスだった。ワインだらうがキャビアだろうが、飲み放題食べ放題。朝から厚さ三センチのステーキ。オーバーブッキング万歳である。でもそれで運を使い果たしたのかな？ ふと僕は思う。

オークランド空港には、ジョイが迎えに来てくれていた。去年長野のスキー場のバイトで知り合ったNZ美人だ。僕はジョイと一緒にキャンプをしましうねと誘ってくれたから、はるばるNZまで来たのだ。なのにすでにジョイには熱気球のように巨大な彼氏が



一台目の車に手を振る。
目指すは330キロ先の
CHRISTCHURCH。

て、一緒にキャンプなどとてもできない話だった。

ならばと次はイングリッドのところに向かう。僕と一緒に喫茶店にいた陽気なキーウィギャルだ。ところがキリンのように素敵なイングリッドの夏休みはちょうど終わってしまったところで、やはり一緒にキャンプは無理だった。

だから僕は資金援助と引き換えの条件で連れてきてやった、カエルの顔をしたふーすけと二人きりで、ずっとタンデム（二人乗り）の旅をしなければならない羽目になってしまったのだ。これがそもそも不幸の始まりだったのではないかと思う。

それにしても、レンタルのバイクで良かった。当初は買うつもりでいたのだ。ところがNZは中古でもオフロードバイクは非常に高い。日本での新車と同じくらいする。一方、オンロードバイクの中古はけっこう安く売っている。だけどオフがいい。結果レンタルすることにした。保証金はどうなるかは分からないけれど、買ったバイクを盗まれた場合よりはずっと良かったはずだ。



ジョイと家族。ジョイも将来お母さんのような体型になるのか。羊を飼っている。



レンタルバイク屋にて。なにか張り切る様子のふーすけ。

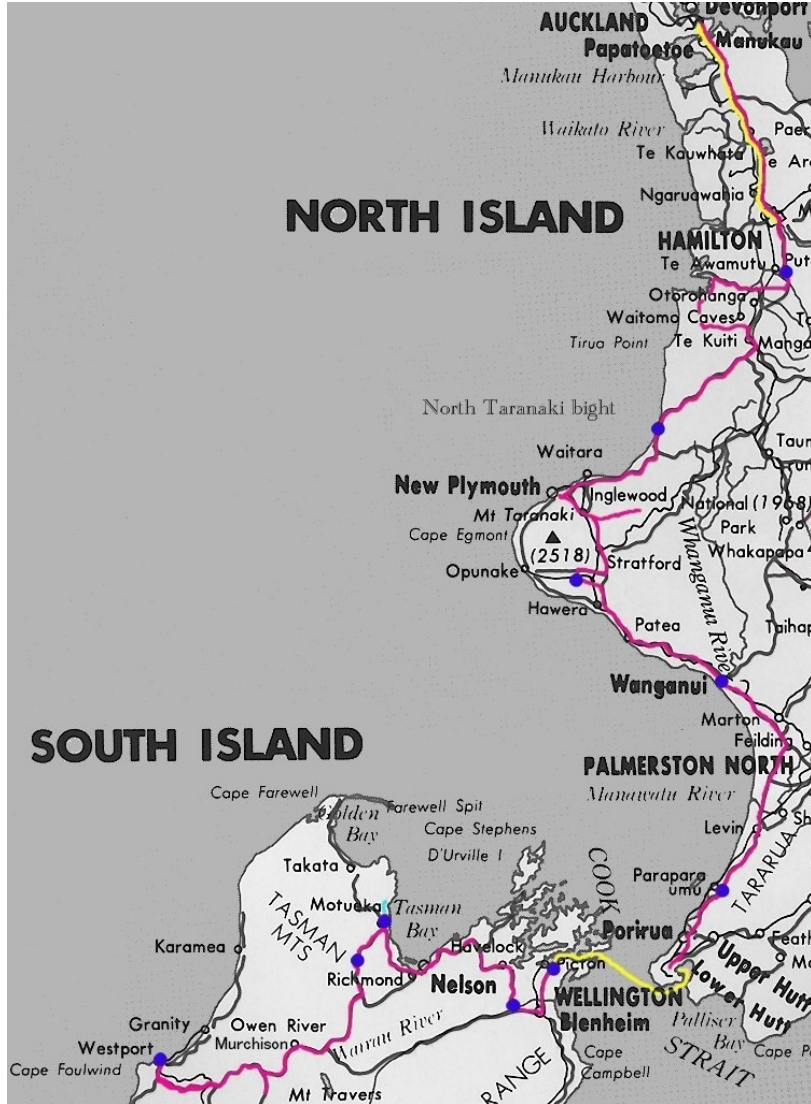


MAROKOPA FALLS.
原始の雰囲気が漂う。

旅のシーンも次々と蘇る。

よみがえ

風圧が激しい。時速は百キロ。制限速度ピッタリ。左右の牧場の風景はすぐさま後方に飛び去っていく。それでも牧場を区切るポプラ並木は果てることなく、次々と僕たちを迎えてくれる。行く手彼方の山脈には雲が棚引き、ここまでおいでと誘ってくれる。上体を伏せて、さらに加速する。時速百二十キロにメーターが上がる。何の不安も感じない。この速度にも、見知らぬ大地を当てもなく旅していくことにも。



野宿の夜の焚火。誰もいない静かな川原。ワインを一口飲んで、星空を見上げる。逆立ちしたオリオン。目を疑うほど輝いている銀河。

「どれが南十字星かしら？」

僕たちは星空を指さしながら、美しい一つの星座を見つけるのに夢中になった。この広大な世界から、たった一つの幸せを捜すように。

牧草地の奥に見える、薄紫色の独立峰。ニュージーランド富士と呼ばれる、マウント・エグモント。麓のキャンプ場には誰もテントを張っていないくて静かだった。だけど突然やってきた団体に、一緒にバーベキューを食べませんかと誘われて、そのあと運動会までやることになってしまった。楽しかった。

初日のテント地となったテ・アワムツのキャンプ場では、オフィスのおばあさんに『ニュー・ジールランドは好き?』とにつこり聞かれて、僕たちも笑顔で『YES』と答えたものだ。果たしてバイクが盗まれた今は、素直に好きだと言えるだろうか。

いきなり後輪のスポークが、三本折れた。後ろのふーすけを荷物だと考えれば、キャンプ道具と合わせて百キロを積んでいることになる。スポークが折れたことでパンクして、道端でパンク修理。海辺の町に立つ煙突のような展望台に登って下りてくると、駐車場でまたパンクしていて、観光客たちに取り囲まれながら、二度目のパンク修理。

TEAWAMUTU.
初日のキャンプ場。



NORTH TARANAKI
BIG HTの真つ黒な砂のビーチ。



波から逃げ遅れたふーすけ。
楽しそう…。



道から見た牧場の風景。
走っていれば、このような
景色が普通に見られる。



ニュージーランド富士と呼ばれる、
Mt. EGMONT。
別名TARANAKI。



唯一無料でテントが張れた
キャンプ場。
STRAITFORD 郊外、
KAPUNI キャンプ場。



考えてみれば、もともとあのバイクは良くないバイクだったんだ。いくら荷物が重くたって、普通に走っていてスポークが折れたりするもんか。ハンドルは初めから少し曲がっていたし、ウインカーも傾いてついていたし、ブレーキは利かなかったし…。

旅のシーンへと記憶を戻す。

すさまじい水量と、湧き上がる水しぶき。大地が突然に食い違い、一瞬にしてできた滝。いつまでも続く亜熱帯のジャングル。その切れ間から見えた、原始そのままのビーチ。黄色い花が咲き乱れた牧草地。アカツメクサが埋め尽くした丘陵地。真黒な砂のビーチに打

黄色い花が埋め尽くした牧場。
なんとも牧歌の世界。



炎天下でのパンク修理。
原因は、スポークが突然
折れたため。



再びパンク修理。観光客たちが
集まってくる。NZ人はみんな
親切で、しきりに何か手伝って
くれようとする。おかげで
ちつとも、はかどらない。



ち寄せる黒い波。白い砂が眩しく光る、まっ平らな乾燥地帯。群青色の夕空に浮かんだ、
奇怪なほど赤く染まった雲…。

NELSONの乾燥地帯。
まっ平らな土地の、白い砂が
眩しい。



なんでもない道端の空地にも、
花が咲く。



小さな町でも、たいいてい
立派な教会がある。



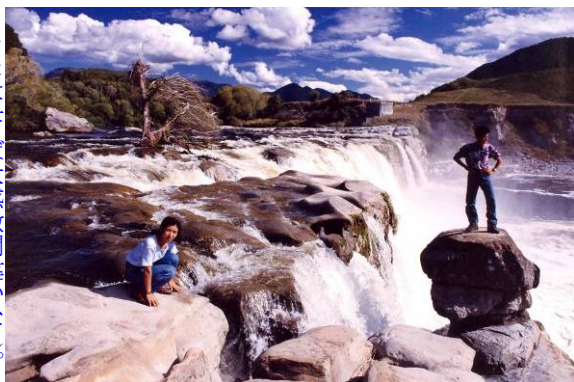
蒼き風に抱かれて



頭上にサザンクロスが輝く。
一日の締めくくりに、焚火が
できれば言うことなし。



地震で一瞬にしてできた滝。
MARUIA FALLS。
MURCHISON近く。



ここに立てば大感激間違いなし。



美しいWEST PORTの
夕焼け。しかしこの夕焼けは
不幸の前兆だった…？

牧場の中に立っていた巨木。本当はふーすけが登りたくて
仕方がなかったのだ。



ABEL TASMAN COAST TRACK。
NZではトレッキングのことをトランピングという。

